

©東京新聞2012年11月21日



高齢化に伴って、認知症患者が増えています。九月現在の六十五歳以上の人口は三千七

十四万人。この年齢層の認知症の有病率を10%と仮定すると、三百万人以上の患者がいることとなります。

B子さんは昔、外務省に勤めていたキャリアアウーマンでした。自宅には、異国で撮られたであろう、赤いコートを着てさっそうとした姿の写真が飾ってあります。いつもその写真の説明してくれるのですが、B子さんにとってそれはつい最近のことのようです。

B主人を十年以上前に亡くし、一人暮らしをしていたので、誰も認知症の発症に気づきませんでした。夏の暑

## Dr. 松井英男の在宅医療のカルテ



### 独居の認知症

## ご近所や交番も手助け

い日、道端で倒れているところを発見され、救急車で病院に運ばれました。熱中症で入院して点滴治療を受け、自宅に戻りました。

認知症の診断はこの入院によって、初めてなされました。私たちがヘルパーによる薬の内服の介助が必要でした。

（川崎高津診療所院長）  
次回は十二月十二日掲載



グループホームを訪れ患者を診る松井英男院長＝川崎市で

た。安否は電話とご近所の方の声掛けで確認しました。近所の交番にも事情を話し、徘徊の時には連絡してもらうことになりました。このように、独居の認知症患者の在宅ケアには、医療だけでなく、さまざまな人の援助が必要になります。

B子さんはある日、自宅で転倒して腕を骨折。日常生活が困難となり、グループホームに移ることになりました。引き続き訪問診療を行っていますが、一人暮らしの時の不安そうな表情は消え、時おり笑顔も見られるようになりました。